

鳥取県

令和

7

年度版

海洋環境・水産資源レポート

これ一冊で鳥取の海と魚の
実態や今後の動向がわかります！

鳥取の海の幸をいつまでも漁獲するために

ドローンを使い藻場の面積を
広範囲に調査



松葉がにの資源が回復傾向。R7年漁期の
松葉がにの漁獲量は前年より61%増加。
漁業者の自主的資源管理の継続、強化が実る



スジアオノリの安定的な陸上養殖方法や
販路について漁業者と協力して調査を実施



R7年5-6月に鳥取東部でスルメイカが好漁。
R7年4月からいか釣り漁業者に依頼し、広域漁
場調査を開始 (写真はR7. 5. 30の田後港地方卸売市場)



R7年10月に日本海ズワイガニPR協議会が発足。先進的にズワイガニの資源管理に取り組む
5府県(石川、福井、京都、兵庫、鳥取)で日本海のズワイガニを一体的にPR



鳥取県水産試験場
鳥取県栽培漁業センター



目次

	2025年を振り返ってみると トピック	・・・1
	・ クロアワビの新たな資源管理の取組(個別漁獲割当の導入)について	・・・3
	・ スジアオノリ陸上養殖の取り組みについて	・・・4
	・ スルメイカ北上回遊群の漁場予測の試行	・・・5
	・ マアジ新規加入量調査における加入量指標値とまき網漁獲尾数との関係性の見直し	・・・6
第1章	鳥取の港	
	・ 沖合漁業の港	・・・7
	・ 沿岸漁業の港	・・・8
第2章	海洋環境	
	・ 鳥取沖の海の特徴	・・・9
	・ 鳥取沖調査海域の水温変化	・・・11
	・ 鳥取沿岸の水温、潮流変化	・・・12
	・ 美保湾の表層水温等の旬別変化	・・・14
第3章	水産資源	
	まき網漁業の概要	・・・15
	・ マアジ	・・・17
	・ マサバ	・・・19
	・ カタクチイワシ	・・・21
	・ マイワシ	・・・23
	・ ブリ	・・・25
	・ クロマグロ	・・・27
	いか釣り漁業の概要	・・・29
	・ スルメイカ	・・・30
	・ ケンサキイカ	・・・32
	沖合底びき網漁業の概要	・・・34
	・ ズワイガニ	・・・36
	・ アカガレイ	・・・38
	・ ソウハチ	・・・40
	・ ハタハタ	・・・42
	べにずわいかご漁業の概要	・・・44
	・ ベニズワイ	・・・45
	沿岸漁業の概要	・・・47
	・ ヒラメ	・・・49
	・ サワラ	・・・51
	・ マダイ	・・・53
	・ ブリ(主にハマチ銘柄)	・・・55
	・ キジハタ	・・・57
	・ ソデイカ	・・・59
	・ サザエ	・・・60
	・ クロアワビ・メガイアワビ	・・・61
	・ イワガキ	・・・62
	・ バイ	・・・63
	・ マナマコ	・・・64
	令和8年度以降の水産試験場と栽培漁業センターの取り組み方針	・・・65

※本紙の漁獲量と水揚量の
表記の違いについて

漁獲量＝各漁船、漁業者が漁獲
した量(属人)

水揚量＝本県船、他県船問わず、
各港に水揚げされた量(属地)

2025年を振り返ってみると

海洋環境

・鳥取県沖調査海域の水温変化

2月から6月は概ね平年より低め、7月以降は概ね高めに推移しました。10月は平年より2.9℃高い水温が認められました。

・鳥取県沿岸域の水温、潮流変化

表面水温は、8月上旬から10月下旬まで平年より2.3～2.9℃以上高く推移しました。酒津沖の潮流は、3月、8～10月、12月に0.5ノットを超える西方流（逆潮）が認められました。

秋季の水温が
平年より高めに推移

詳しくは11～12ページをご覧ください

赤潮・エチゼンクラゲ

2025年は有害赤潮（コクロディニウム・ポリクリコイデイス、カレニア・ミキモトイ）は確認されませんでした。

エチゼンクラゲの来遊は少なかったです。

主な漁獲動向

まき網漁業

- ☹️ マアジの漁獲量は減少
- 😊 マイワシは増加
- 😊 クロマグロはやや増加
- ☹️ ブリは減少

イカ釣り漁業

- ☹️ スルメイカは減少
- 😊 ケンサキイカは横ばい
- 😊 ブドウイカは横ばい

沖合底びき網漁業

- 😊 ズワイガニは増加（特に松葉がに）
- 😊 アカガレイは横ばい
- 😊 ソウハチは横ばい
- 😊 ハタハタは横ばい

べにずわいかご網漁業

- 😊 ベニズワイの漁獲量は横ばい

沿岸漁業

- ☹️ サワラは減少
- ☹️ ヒラメは減少
- 😊 マダイは横ばい
- ☹️ キジハタは減少
- ☹️ ソデイカは減少
- ☹️ サザエは減少
- ☹️ アワビは減少
- 😊 イワガキは横ばい
- 😊 バイは横ばい
- ☹️ マナマコは減少

詳しくは、2、15～63ページをご覧ください

2025年を振り返ってみると

資源状況、漁獲評価

各魚種の国による資源評価及び、本県の漁獲評価については下表の通りです。

【下表の凡例】

セルの色	説明	矢印の色	説明	矢印の向き	説明
緑	漁獲圧・親魚量共にMSY達成の水準以上	水準	高位	動向	増加
黄	どちらか一方がMSY達成の水準以上		中位		横ばい
赤	漁獲圧・親魚量共にMSY達成の水準未満		低位		減少

魚種	系群	国による資源評価		県による漁獲評価 水準・動向	
		最大持続生産量(MSY)を実現する値に対する状況			
		漁獲圧 (括弧内は達成比率)	親魚量 (括弧内は達成比率)		
まき網漁業	①マアジ	対馬暖流系群	下回る(77%)	下回る(69%)	↓
	②マサバ	"	下回る(83%)	上回る(103%)	↑
	③カタクチイワシ	"	上回る(149%)	下回る(18%)	↓
	④マイワシ	"	下回る(44%)	下回る(67%)	↑
	⑤ブリ	-	上回る(113%)	下回る(97%)	↓
	⑥クロマグロ	-	資源水準・動向 ↑		↑
イカ釣り漁業	⑦スルメイカ	秋生まれ群 秋季発生系群	下回る(43%)	下回る(19%)	↓
		冬生まれ群 冬季発生系群	下回る(53%)	下回る(22%)	↓
	⑧ケンサキイカ	ケンサキイカ 日本海・東シナ海系群	資源水準・動向 →		↑
沖合底びき網漁業	⑨ズワイガニ	日本海系群 A海域	下回る(35%)	上回る(264%)	↑
	⑩アカガレイ	日本海系群	下回る(45%)	上回る(125%)	↑
	⑪ソウハチ	日本海西南部系群	下回る(27%)	上回る(137%)	↑
	⑫ハタハタ	日本海西部系群	資源水準・動向 ↓		↑
べにずわいかご網漁業	⑬ベニズワイガニ	日本海系群 (大臣許可水域)	2024年の資源量水準は53.6% 目標水準(80%)及び限界水準(56%)を下回る		↑
沿岸漁業	⑭ヒラメ	日本海中西部・東シナ海系群	上回る(132%)	下回る(53%)	↓
	⑮サワラ	日本海・東シナ海系群	2024年の資源量水準(86.1%) 目標水準(80%)を下回り、限界水準(56%)を上回る		↓
	⑯マダイ	日本海西部・東シナ海系群	上回る(157%)	下回る(35%)	↑
	⑰ブリ(主にハマチ銘柄)	-	-	-	↓
	⑱キジハタ	-	-	-	↓
	⑲ソデイカ	-	-	-	↓
	⑳サザエ	-	-	-	↓
	㉑クロアワビ・メガイアワビ	-	-	-	↓
	㉒イワガキ	-	-	-	↑
	㉓パイ	-	-	-	↑
	㉔マナマコ	-	-	-	↓

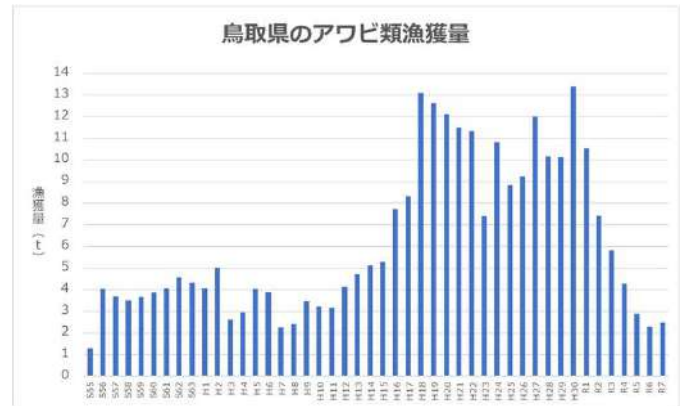
※ 国による資源評価の表記の仕方: 資源管理目標案等を提示した資源評価の対象魚種系群についてはMSY(最大持続生産量)を実現する値に対する現状の漁獲圧及び親魚量の状況を表記。なお、TACにより漁獲制限がかかっているクロマグロ及び、資源管理目標案等を提示していない資源評価の対象系群については国による資源動向の評価を記載。(※国の資源評価は2024年の状況)

※ 県による漁獲評価の考え方: 水準は、過去2番目に多かった漁獲量を3等分し、低・中・高位に振り分け、動向は、直近5年間程度の漁獲動向を基本としながら、長期的な状況なども考慮して、県の水準と動向を担当者により総合的に判断した。

クロアワビの新たな資源管理の取組(個別漁獲割当の導入)について

はじめに

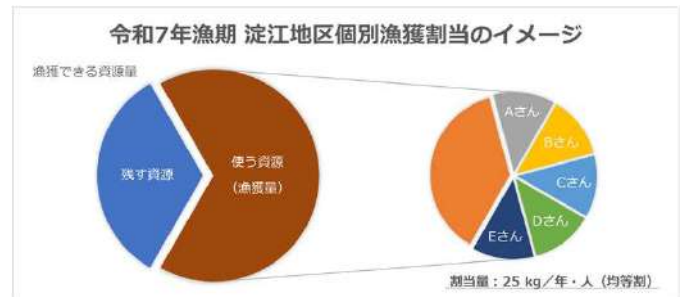
潜水漁業における水産上重要資源のアワビ類（クロアワビ・メガイアワビ）は、昭和50年代から県内各地先で種苗放流による資源増殖が行われてきました。平成16年頃に導入された放流手法（ヒトデやタコなどの外敵駆除、外敵から襲われにくい岩の隙間へ放流）により、漁獲量は平成18年に初めて10トンを超え、平成30年には13トンに達しました。しかし、その後、漁獲量は年々減り続け、令和5年以降は3トンを下回っています。このような状況の中、鳥取県漁業協同組合淀江支所の海藻部（潜水漁業者グループ）では、減少したクロアワビ資源を回復させるため、令和4年6月1日から令和7年4月24日までの約2年11カ月の休漁に取り組みました。また、令和7年4月25日（令和7年漁期）の解禁に合わせて個別漁獲割当を導入し、新たな資源管理に取り組むことになりました。



※漁獲量のうちメガイアワビの漁獲量はごくわずか

個別漁獲割当

個別漁獲割当（IQ：Individual Quota）とは、漁業者ごとに年間の漁獲量を割り当て、漁獲を制限して漁獲量を管理する資源管理手法の一つで、様々な魚介類で導入されています。割当量を決定することで、使う資源（漁獲量）の上限が固まり、過度な漁獲を防ぐことができます。さらに、割当量の枠内で漁獲するため、漁獲競争が抑えられ、漁獲の分散により、価格が暴落しにくくなります。淀江地区では漁期前に話し合いが行われ、令和7年漁期の割当量を一人あたり上限25kg（25kg/年・人）の均等割に決定しました。そこで、栽培漁業センターは、その割当量が適正かどうかを判断するため、漁獲情報の収集を行いました。



漁獲情報の収集

漁獲情報の収集は、標本船調査と漁獲情報提供システムにより行いました。標本船調査では、海藻部の代表者に漁獲サイズや天然・放流の別などの記録をお願いしました。また、漁獲情報提供システムでは、淀江支所の漁獲実績から漁業者別漁獲量などを集計しました。これらの情報を整理したところ、漁獲個体の約4割が放流ものであり、クロアワビの資源増殖にとって種苗放流は重要であると考えられました。また、漁期後半のCPUE（kg/日・人）が高かったことから、令和7年漁期の利用可能な資源量には余裕があり、まだ漁獲できたと考えられました。



※漁獲サイズは、クロアワビを耐水野帳にのせて、殻の端から端までの長さを(殻長)を鉛筆で記録

今後の取組

整理した結果を基に淀江地区で話し合いが行われ、令和8年漁期の割当量は、令和7年漁期の5kg増しの30kg/年・人に決定されました。また、より精度の高い割当量の決定に資するため、令和8年漁期からは海藻部の全部員が標本船調査に参加することになりました。なお、3年後の令和10年漁期には淀江地区の海藻部及び淀江支所職員でクロアワビの漁獲情報の取扱いができるようデータの整理方法を引き継ぐこととしています。



さいごに

淀江地区での新たな資源管理の取組が成功すれば、県内他地区への導入もできると考えられます。栽培漁業センターでは、引き続きクロアワビのより良い資源増殖及び資源管理の確立を目指して、漁業者と連携して調査・研究に取り組んで参ります。

スジアオノリ陸上養殖の取り組みについて



はじめに

スジアオノリ (*Ulva prolifera*) は、緑藻の1種であり、お好み焼きなどの粉ものに振りかけたり、のりしお味のポテトチップスに配合されていたりと、身近なものによく使われる海藻ですが、アオサ属の中でも、最も香りが良いとされ市場では最高級品の1つとして取り扱われています。

このスジアオノリ、もともとは徳島をはじめとする四国周辺で生産量の多い海藻で、海水温の上昇などで天然海域での養殖を含む生産量が激減するなか、高知大学において陸上養殖の手法が開発され、各地で養殖が行われて生産量が回復したという経緯があります。

栽培漁業センターでは、同手法を用いて身近な海域から採取したスジアオノリから種苗を生産し、県内各地の養殖希望者に対する養殖技術の普及に取り組んでいます。

普及の様子

現在栽培漁業センターと協力してアオノリ養殖にチャレンジしているのは鳥取県漁協青谷支所海藻グループと、三光株式会社の2者です。

青谷支所では漁業者が養殖を行っており、栽培漁業センターの作成した「アオノリ養殖マニュアル」に沿って種苗の生産～加工までのレクチャーを行いました。水槽は古い活魚水槽を改造したもの、養殖には現場の生海水を用い、アオノリの乾燥には板ワカメ製造用の椎茸乾燥機を活用する等、少ないイニシャルコストで開始し、わずか数か月で製品化までたどり着きました。屋外での飼育で、令和8年の冬は特に積雪が多かったことから、水温の低下を抑えるために注水量を増やしたり、夜間は水槽に蓋をするなどコンスタントに生産を続けるために様々なアイデアを凝らしました。

一方、三光株式会社は、廃棄物処理に用いる焼却炉の廃熱利用で飼育水温を適温に保てるという強みがあり、厳寒期でも安定した水温で培養することができました。また、アオノリ養殖は日光が燦々と射す屋外で行うことが一般的ですが、三光株式会社ではLED照明を使って屋内養殖を行っています。屋内では落ち葉などの混入がないため、加工時に異物除去の手間がないといったメリットがありました。こちらはまだ試験段階で加工・出荷等は行っていませんが、今後の非常に楽しみです。



青谷支所での養殖の様子



三光株式会社での養殖の様子

アオノリ養殖の強み

アオノリ養殖は魚の養殖と異なり、病気等のリスクが小さいこと、日々の作業量が少なく済む点がメリットとして挙げられます。また青谷支所も三光株式会社も、一般的な方法と異なる方法で養殖を実施していますが、生産することができます。最適解ではなくても、それぞれの現場の状況にあったやり方でアレンジが加えられる余地がある、懐の広さがあるのがアオノリ養殖の魅力的なところではあります。

今後の取り組み

スジアオノリは飼育水温や栄養塩、そもそも株の違いなど、様々な要因によってその成長や仕上がり具合に大きな差が生まれることが経験的にわかってきました。またスジアオノリは水温が高いほど成長が早いという性質があるものの、20℃前後を境にそれ以上の水温になると成熟が進み、却って成長が停滞するという現象が起こります。ですが主に太平洋側や黄海周辺をはじめとする地域には、25℃以上の高水温でも成長する性質を持つアオノリ株が存在することが知られており、全国的にはこのような株を使って養殖を行っているケースもあります。

今後はこのような課題を掘り下げて検討・普及を行っていくことが今後のテーマになりそうです。



アオノリの乾燥作業の様子



はじめに

スルメイカは日本における重要な漁業資源の一つであり、かつては我が国の代表的な水産物でしたが、近年は水揚量の減少傾向が顕著となっています。鳥取県においても、水揚量は年々減少傾向が続いており、2011年には約3,000トンありましたが、2025年は約300トンまで落ち込みました。

要因としては、資源量の減少に加え、昨今の燃油高騰に出漁控えや、海洋環境の変化による来遊時期等の変化、漁船隻数の減少による漁場探査力の低下等が考えられます。水産試験場では、これまでにイカテレフォン（イカ漁況案内電話自動応答）や、試験船（第一鳥取丸）による漁場調査を実施してきましたが、現場からは漁況情報の充実が求められています。

そこで、水産試験場では令和7年度から沿岸漁業者による広域かつ高頻度なスルメイカ漁場調査を実施し、関係者間で漁場情報を共有することで、漁場探査の効率化を図っています。また、調査により収集した漁場の位置情報を活用したスルメイカの漁場予測を試行しました。

漁場予測の方法

県内10トン未満いか釣り漁船（自動イカ釣り機搭載船 計19隻）による野帳データ（4～5月）から、スルメイカの漁獲が確認された緯度経度を抽出しました。

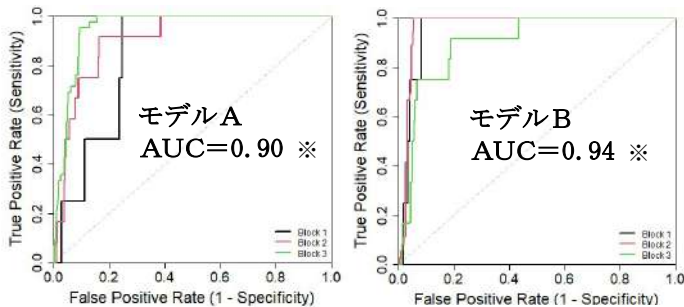
海洋環境データは、九州大学応用力学研究所が開発した日本近海の海況予報 DREAMS (<https://dreams-cl.riam.kyushu-u.ac.jp/vwp/>) の水深別の水温、塩分、流速、海面高度偏差及び混合層厚を用いました。当該データは、野帳データの「主な漁獲時刻」に最も近い時間で抽出しました。

海底地形については、GEBCO公式サイト (<https://www.gebco.net/>) のデータを用いました。

モデル学習は、RのMaxEnt (Maximum Entropy Species Distribution Modeling) パッケージを用いました。海洋環境データのうち水温、塩分及び流速については、表層から63.5m深までの8層を用いたモデルAと、表層から81m深までの9層を用いたモデルBを試行しました。

結果

モデル精度を示す指標値となる「適合度 (AUC)」を算出したところ、両モデルにおいて0.9以上を示し、モデル精度は高いと評価されました。学習モデルの精度を支える海洋環境データの重要度については、21.25m深塩分と水温差Δ3-50mの順位がモデル間で一致しましたが、水温については、モデルAでは63.5m深、モデルBでは3m深が2位となり、異なる結果が得られました。



モデル適合度 (AUC)

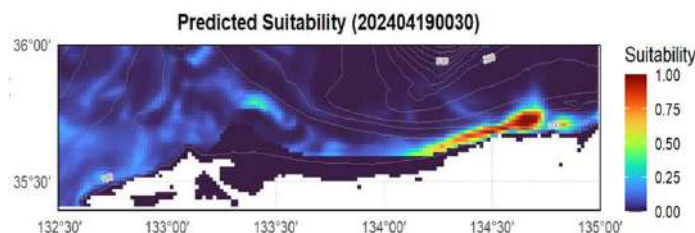
※Spatial 3-fold CVによる平均値

順位	モデルA	モデルB
1	塩分21.25m (44%)	塩分21.25m深 (47%)
2	水温63.5m深 (25%)	水温3m深 (17%)
3	水温差Δ3-50m (18%)	水温差Δ3-50m (10%)

モデルごとの重要度とその割合（上位3項目）

おわりに

MaxEntは学習に用いる環境データや漁場データの数、空間的分布の仕方により、モデル性能が大きく変わります。今後は、スルメイカの生態と合致する解釈性の高いモデル構築を目指し、環境データの取捨選択、漁場データの確保等に努め、モデルの精度向上を進めたいと考えています。

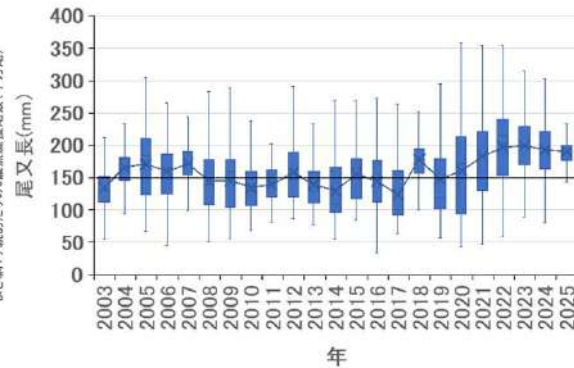
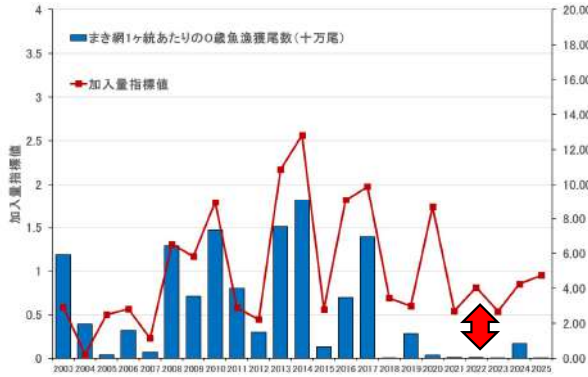


2025年4-5月の漁場データから作成したモデルを用い、2024年4月19日のスルメイカ漁場を再現したもの

マアジ新規加入量調査における加入量指標値とまき網漁獲尾数との関係性の見直し

【背景】水産試験場では、2003年から毎年5～6月にかけて「マアジ新規加入量調査」を実施しています。この調査では試験船「第一鳥取丸」により稚魚採集用の表中層トロール網（網口：12m）を曳網し、その年生まれのマアジ稚魚（体長4cm程度）を採集することで稚魚の分布や発生状況を把握しています（写真）。

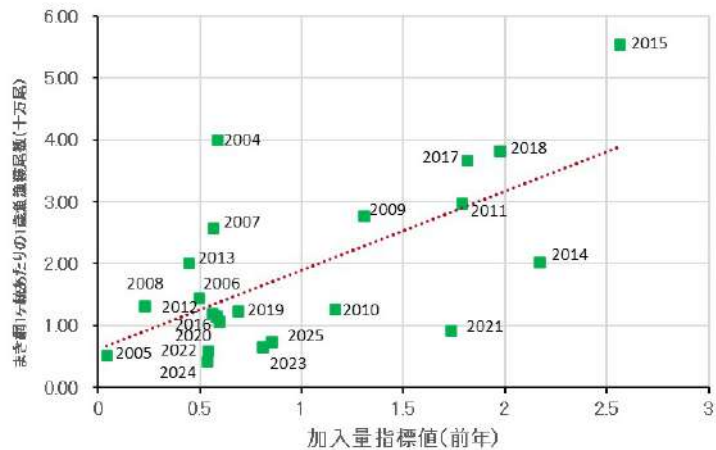
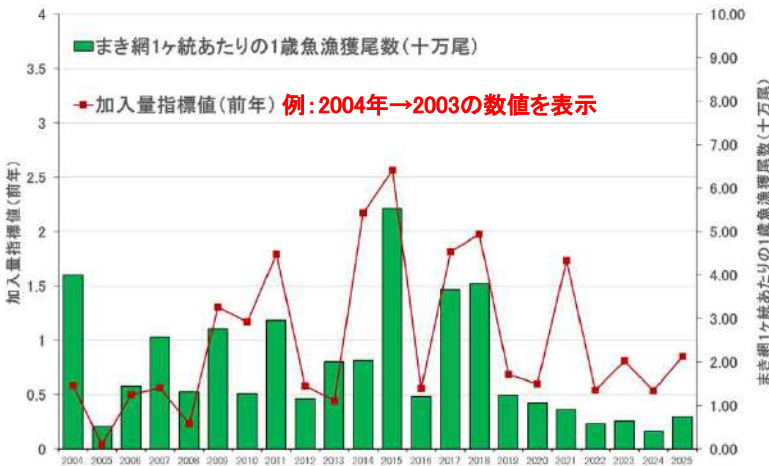
毎年、得られた加入量指標値（その年生まれのマアジ稚魚の発生量の指標）については、漁業関係者向けに発表し、下期の0歳魚の漁況予報に活用してきました。しかし近年、加入量指標値に対する0歳魚CPUE（まき網1ヶ統あたりの漁獲尾数）が極端に低い水準で推移し、漁況予報が困難となっていました（図1）。漁獲物組成を確認すると、近年、漁獲サイズが大型化してきている状況が見られたため、0歳魚CPUEではなく、1歳魚CPUEと加入量指標値との関係性を検討しました（図2）。



（図1）6～12月に境漁港のまき網漁業で水揚げされるマアジの0歳魚CPUEと加入量指標値の年変化

（図2）まき網漁業で水揚げされるマアジの尾又長組成の年変化

【結果】



（図3）1～12月に境漁港で水揚げされるマアジの1歳魚CPUEと前年加入量指標値との関係

0歳魚は夏以降に漁獲対象として加入するため、0歳魚CPUEと加入量指標値との関係性を見る場合は、CPUEの算定期間を6～12月としていました。一方、1歳魚の場合は6月以前にも漁獲されるため算定期間を1～12月としました（図3左）。1歳魚CPUEと前年加入量指標値とについて、相関係数の算出・検定を実施したところ、有意な正の相関が確認されました（ $r=0.64, p<0.01$ ）（図3右）。漁獲サイズの変化に合わせ、加入量指標値との相関を見るCPUEの年齢を0→1歳に変更することで近年見られていた両者の極端な乖離は一部解消されたと考えています。

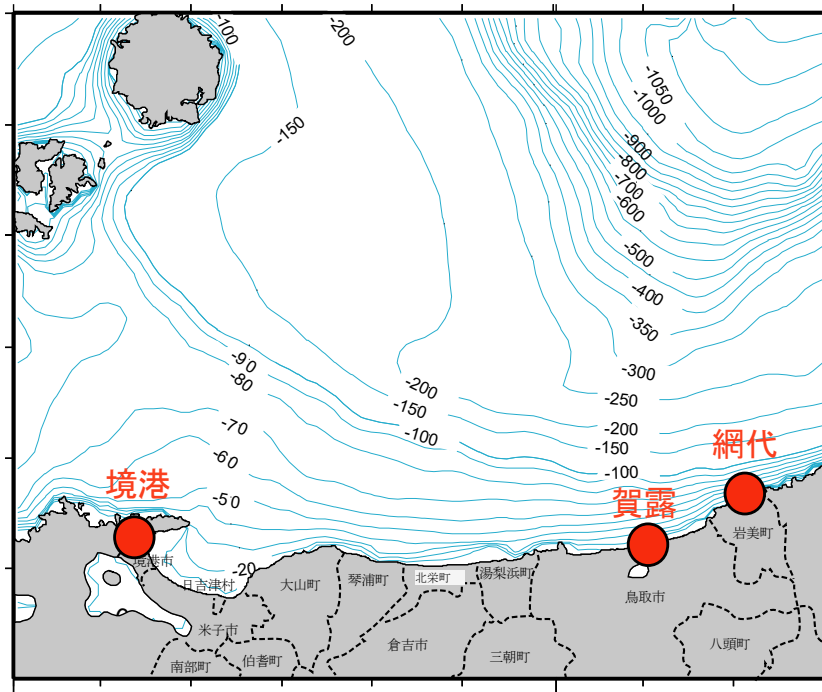
今後もCPUEの算出方法の見直しを行うとともに当調査を継続し、資源動態の把握や漁況予報に役立てていきたいと考えています。

第1章

鳥取の港

沖合漁業の港

鳥取沖で漁獲された魚のうち、まき網で漁獲されたアジ・サバ・イワシなどの浮魚やベニズワイのほとんどは境港に水揚げされ、沖合底びき網漁業で漁獲されたズワイガニやカレイ類などの底魚類は賀露、網代、境港に水揚げされます。



境港(境漁港)



賀露(鳥取港)



網代(網代漁港)



ベニズワイの入札の様子



ハタハタのセリの様子



ズワイガニの活魚水槽の様子

第2章 海洋環境

鳥取沖の海の特徴

何の因果（いんが）で貝殻（かいがら）漕
（こ）ぎなろうた

カワイヤノー カワイヤノ

色は黒うなる 身はやせる

ヤサホーエヤ ホーエヤエー

ヨイヤサノ サッサ

ヤンサノエー ヨイヤサノ サッサ

イタヤ貝の豊漁を歌ったこの貝殻節のように鳥取の海は古くからから沿岸に生活する人々に多くの海の恩恵を与えてきました。

青く澄み渡る日本海、緑豊かな山々。伯耆と呼ばれる西部には秀峰大山がそびえ、山からの豊かな栄養分を海にもたらしてくれます。

因幡と呼ばれる東部では、夏になると鳥取砂丘の沖に白いか（ケンサキイカ）を釣るイカ釣り船の漁り火が美しく輝きます。

浦富海岸の海の洞窟ではマアジの大群が群れを成しています。

このように鳥取県は豊かな海に囲まれ、海の幸を育んでいます。



撮影：山尾賢一氏



撮影：小河義明氏



撮影：中谷英明氏

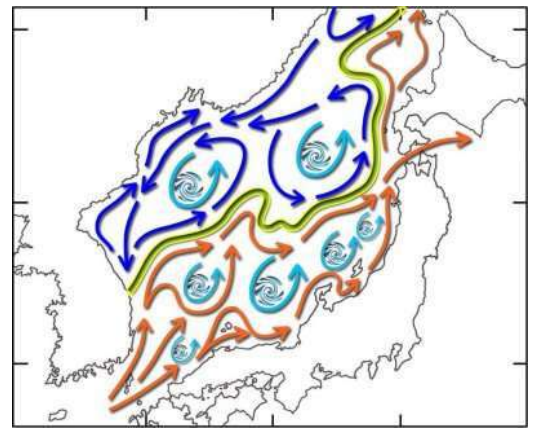
日本海の海の深さ

海の幸つまり海洋生物の棲む場となる日本海は、面積は約130万平方km、平均水深は1,350m、最深部3,700mで、日本海中央部には大和堆と呼ばれる大きな浅瀬があります。南北に位置する4つの浅く狭い海峡によって、東シナ海、北太平洋、オホーツク海とつながっています。



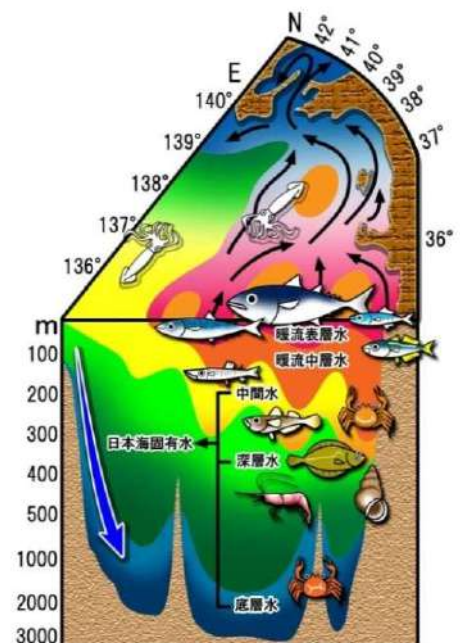
日本海の海流

表層は赤色の矢印で示す東シナ海から流入する温暖・高塩分の対馬暖流と、青色の矢印で示す間宮海峡付近を起源とする寒冷・低塩分のリマン寒流によって特徴付けられます。また北緯40度付近には黄色の線で示す両水塊が接する極前線と呼ばれる大きな潮目があります。中深層には、空色の渦で示す水温・塩分がほぼ一定な“日本海固有冷水”と呼ばれる水塊があります。特に山陰東部沖の冷水塊を山陰・若狭沖冷水と呼んでいます。



生物の住みかとしての日本海

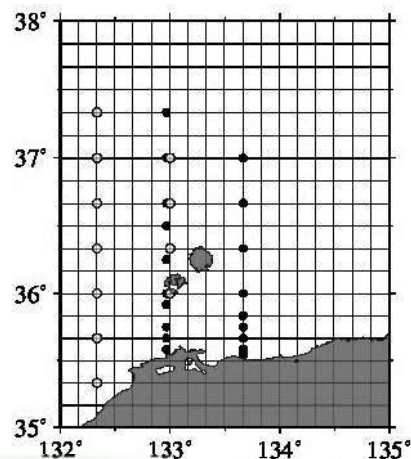
鳥取の海の底には大山の火山岩からなる天然礁があり、プランクトンや小魚などの餌が豊富なためそれらを食べる多種多様な水産生物が集まってきます。海表面から水深100mまではイワシなどの小魚や、それらを食べるクロマグロが回遊しています。日本海固有冷水が影響する水深200mから海底付近では、松葉がに（ズワイガニ）やハタハタ、アカガレイなどが棲んでいます。これらの水産資源を適切に管理しながら、有効に活用する循環型の水産業を目指していくことが大切です。



鳥取沖調査海域の水温変化

鳥取県水産試験場では調査船「第一鳥取丸」を使用して北緯35°～39°、東経132°～134°の海域で1月を除き毎月、海洋観測を行い水温を測定しています。

右図で示した鳥取県周辺海域19定点 (○は7月、●は7月を除いた各月)で測定した水温データを用いて、平年との差異を解析し、水温変化の特徴を5段階で評価しています。



調査海域水温の評価結果

2025年の鳥取県周辺海域19定点平均水温の観測値 (°C) : 上、平年との差 (°C) : 下

水深	1月	2月	3月	4月	5月	6月
0m		11.9 (-0.8)	11.3 (-0.7)	12.2 (-1.3)	14.5 (-0.7)	17.1 (-1.7)
50m		11.9 (-0.7)	11.1 (-0.9)	11.8 (-1.0)	13.2 (-0.7)	14.5 (-1.3)
100m		10.7 (-0.7)	9.8 (-0.9)	10.4 (-0.5)	11.0 (-0.5)	10.9 (-1.9)
200m		1.50 (-1.6)	1.50 (-1.5)	1.90 (-1.0)	1.89 (-0.8)	1.90 (-1.5)

水深	7月	8月	9月	10月	11月	12月
0m	23.5 (+1.4)	28.6 (+2.7)	28.8 (+2.3)	26.9 (+2.9)	20.0 (-0.6)	欠測
50m	16.1 (+0.0)	17.9 (-1.1)	18.9 (-0.8)	-2.13 (-0.1)	19.2 (-0.9)	欠測
100m	11.9 (-0.3)	11.9 (-2.1)	12.6 (-0.9)	14.6 (+0.7)	11.4 (-3.9)	欠測
200m	2.0 (-0.7)	2.4 (-1.1)	4.7 (+1.5)	3.3 (+0.4)	2.0 (-1.6)	欠測

評価方法

下表に従い評価

評価値 $X = (\text{観測値} - \text{平均値}) / (\text{平年標準偏差}) \times 100$ ※ 平均:直近30年

$X \leq -200$	$-200 < X \leq -130$	$-130 < X \leq -60$	
はなはだ低い	かなり低い	やや低い	
$-60 < X \leq +60$	$+60 < X \leq +130$	$+130 < X \leq +200$	$+200 < X$
平年並	やや高い	かなり高い	はなはだ高い

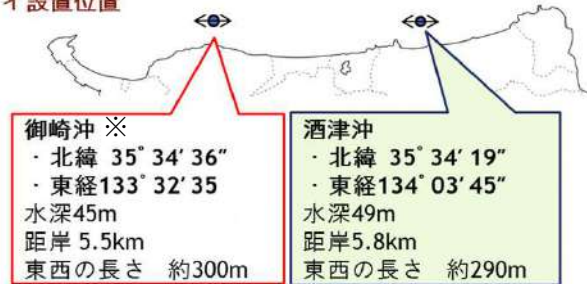
2025年の調査海域の水温は、水深0mで平年とは異なる推移を見せ、2～6月までは平年より低めに推移しましたが、7月以降は高めに推移し、9月以降もなかなか低下せず10月は甚だ高めとなりました。水深50,100及び200mは年間通じて概ね平年並み又は低めに推移しましたが、9月の200mでやや高めが記録されました。

鳥取沿岸の水温、潮流変化

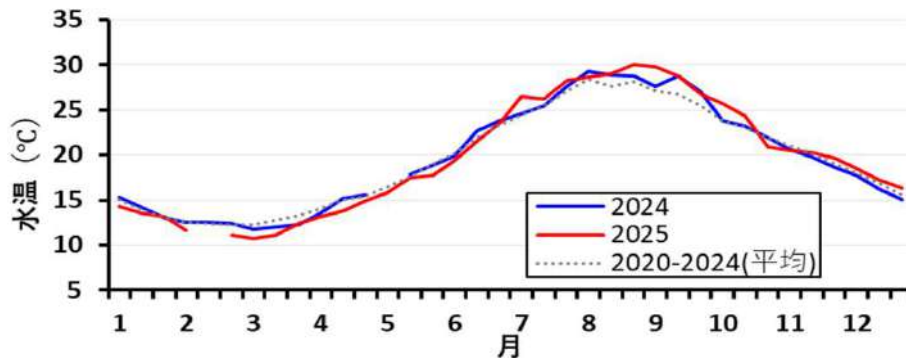
※御崎沖潮流観測ブイは、2024年に廃止しました。



★ブイ設置位置

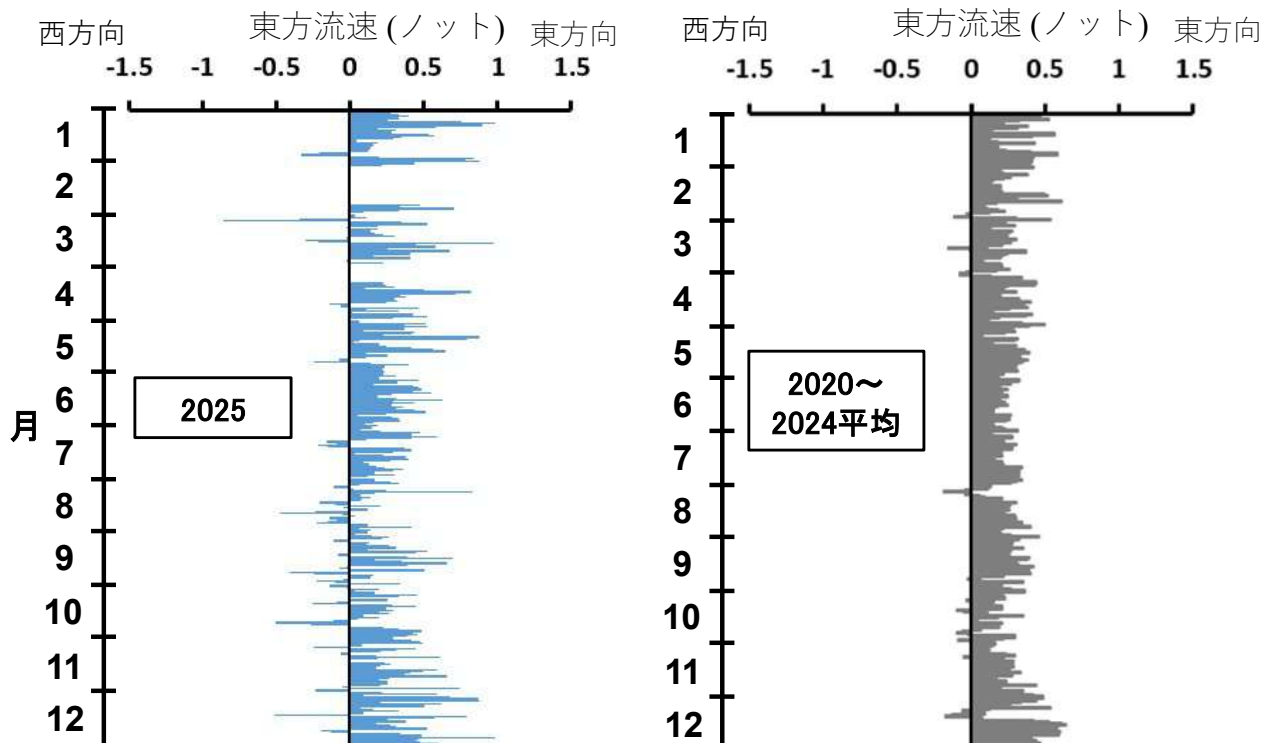


酒津沖潮流観測ブイ 表面水温(旬平均)



2025年における酒津沖潮流観測ブイで測定した表面水温は、8月上旬から9月下旬に平年より1°C以上高く推移しました。

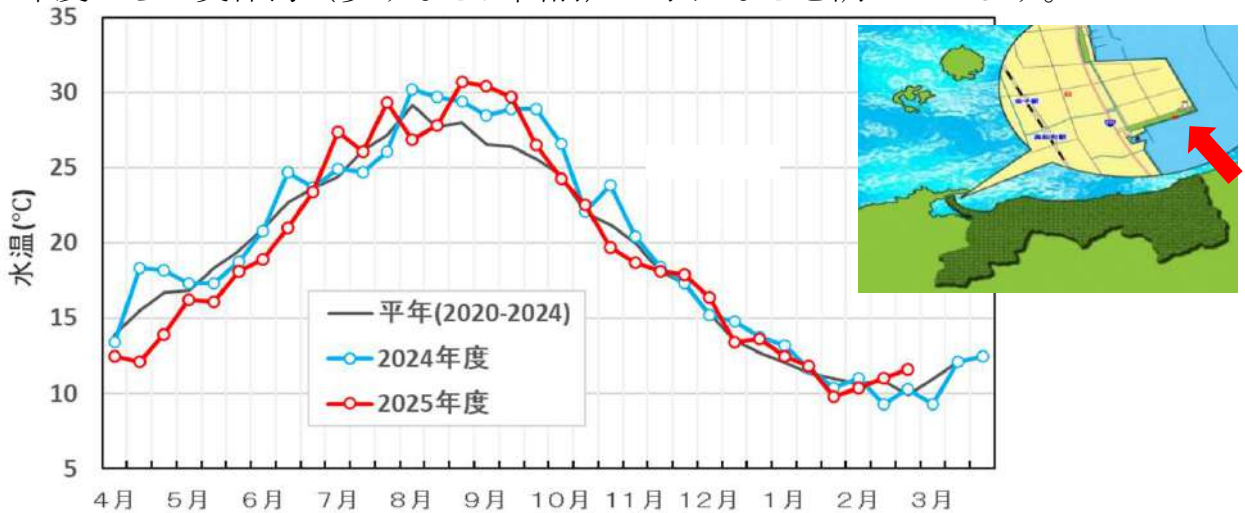
酒津沖潮流観測ブイ 26 m深潮流



正の値=東方向、負の値=西方向の流れを表しています。鳥取沿岸では対馬暖流の影響により東方流が卓越しますが、海況や気象が影響し、2025年の酒津沖では、3月、8-10月、12月に0.5ノットを超える西方流が認められました。

美保湾の表層水温等の旬別変化

2008年度からの美保湾（夢みなと公園前）の水温などを調べています。



2025年度における表面水温は、1月上旬から6月下旬の間は、平年よりも低めに推移しました。一方、7月上旬・下旬と8月下旬から9月中旬の間は、平年より2°C以上高めに推移しました。特に、9月上旬の観測水温は30.4°Cを示し、平年より3.9°C高い値が認められました。

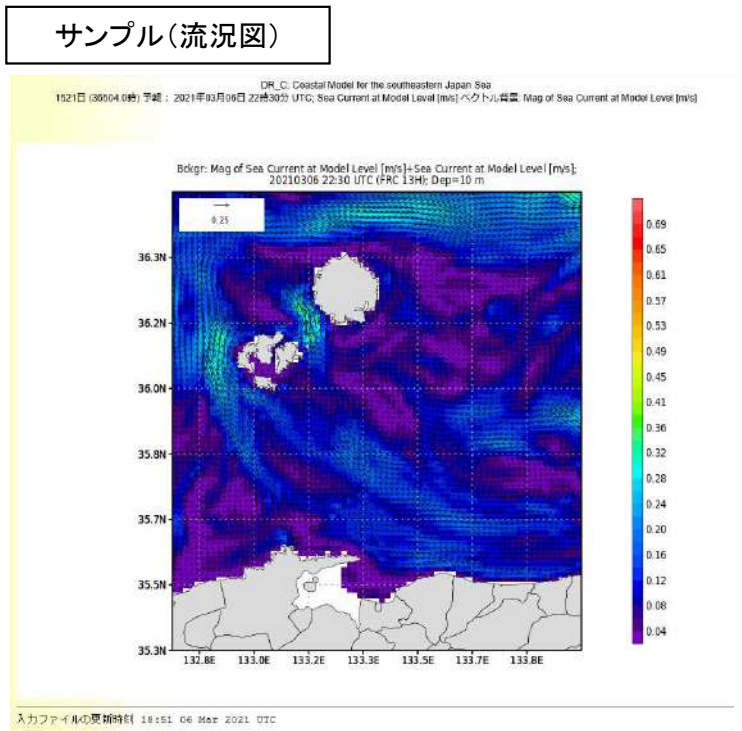
山陰沖の流況・水温・塩分予測図を公開中

入力画面

DREAMS_C 簡易表示ツール(鳥取県の潮流・水温予測図)

日時	2021年03月07日 17時30分	前へ
世界標準時	2021年03月08日 22時30分	表示
水深	10 m	次へ
表示領域	<input type="checkbox"/> 四国～鳥取西部 <input type="checkbox"/> 鳥取県内 <input type="checkbox"/> 鳥取県 <input type="checkbox"/> 鳥取沖 <input type="checkbox"/> 山陰沖	
表示項目	<input checked="" type="checkbox"/> 流況 <input type="checkbox"/> 水温 <input type="checkbox"/> 塩分	
表示方法	<input type="checkbox"/> 相対表示(カースケールの変動します) <input checked="" type="checkbox"/> 絶対表示 ※流速のみ (カースケールは最大0.7m/s(約1.5分)に設定されます)	

※以下の表示は九州大学応用力学研究所のサーバ上で実行されています。詳細の図は同サーバの欄に記載されています。



水産試験場HPで、約7日後までの流況・水温、塩分予測図が閲覧出来るツールを提供しています。日付、水深帯、海域を入力することで、簡単に知りたい予測図を表示させることが可能です。

本ツールは、京都府農林水産技術センター海洋センターから提供して頂きました。また、予測図は、九州大学応用力学研究所に協力を頂き作成されています。現在から過去の時点も含め、海洋・気象観測データなどからシミュレーションモデルで計算された結果で、実際の状況と異なることがありますので、ご承知ください。

漁船からの潮流情報提供システムを運用

漁船からの潮流情報提供システム(以下、「漁船システム」という。)とは、県内の観測協力漁船から潮流計で測定した流速・流向のデータを無線機を経由して収集し(写真)、ホームページ、メール、電話で利用登録した漁業者に提供する、鳥取県水産試験場が独自に開発したシステムです。R8年3月現在、県内沿岸漁船計35隻と沖合底びき網漁船3隻にデータ収集の協力を頂いています。



写真 潮流データ収集協力船の船内潮流計と無線機を接続するケーブルを設置

漁船システムでは、鳥取県沿岸域を12区画に分割し(図1)、出漁中の漁船から収集したデータを区画ごとに解析した代表値を公開しています。観測協力漁船ごとの詳細な操業位置・時間は公開されない仕様になっています。

データは水深別(3層)に30分間隔で公開されるため、潮流状況をほぼリアルタイムに把握することが出来ます(図2)。

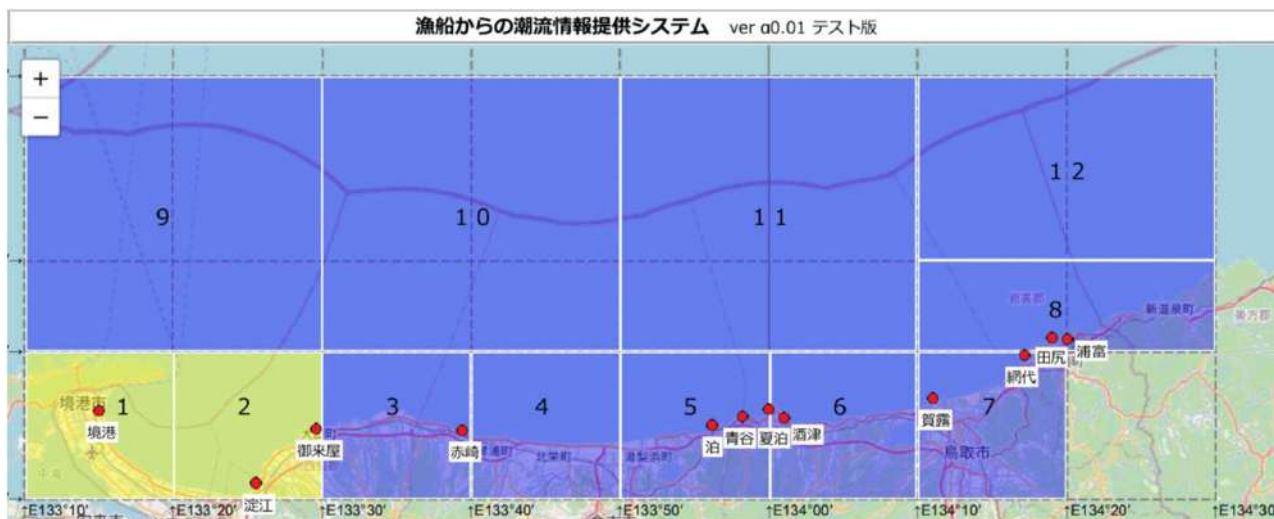
また、潮流観測ブイ(p12参照)とは異なり、観測協力漁船が出漁していれば、御崎・酒津沖(ブイ設置場所)以外の流速・流向を把握することが可能です。

鳥取県水産試験場では、今後、提供データ数を増やすため、引き続き観測協力漁船の増隻を予定しています。是非、漁船システムを、出漁判断や漁場選択等にご活用下さい。(なお、従前の沿岸潮流観測ブイのデータ提供を利用して漁業者はHP上で閲覧可能です。)

トップページに戻る 区画1 美保湾西 潮流情報 2023年9月20日(水)01:24更新

観測日	観測時刻	潮流(ノット)					
		上層(6m)		中層(26m)		下層(34m)	
		流向	流速	流向	流速	流向	流速
2023/06/29	16:30	SE	0.9	E	0.7	E	0.4
2023/06/29	16:00	SE	1.0	E	0.6	E	0.5
2023/06/29	15:30	SE	1.0	E	0.6	E	0.5
2023/06/29	15:00	E	1.0	E	0.6	E	0.6
2023/06/29	14:30	E	1.0	E	0.6	E	0.5
2023/06/29	14:00	SE	0.9	E	0.7	E	0.5

図2 ホームページで閲覧できるデータ(例)



区画番号と名称 1:美保湾西 2:美保湾東 3:御崎沿岸 4:北条沿岸 5:長尾鼻西 6:長尾鼻東
7:砂丘沿岸 8:岩美沿岸 9:美保湾沖合 10:県西部沖合 11:県中部沖合
12:県東部沖合

図1 漁船からの潮流情報提供システムのホームページ画面(最新の潮流情報がある海域は黄色で表示されます)